

窓

— 同窓会だより —

No. 96 (平成 25. 8. 11 発行)

富山県立魚津高等学校同窓会



私が魚高に入学したのは昭和四十年四月。入学式の寺田桂蔵校長の式辞に「君たちは各駅停車であれ」という意味の言葉があったのをよく覚えている。それだからというわけではないが、高校時代は行くあてのない寄り道をした。入学した当初から岩波文庫の「ベートーヴェンの生涯」(シンドラー著、現在絶版)に夢中になり、音楽の専門雑誌に発表される現代音楽の楽譜に見とれた。二年生の時は自分もできれば作曲家になりたいと思っていた。

この年の日本音楽コンクール第一位が当時芸大生の池辺晋一郎で、その総譜が掲載されていたのをよく憶えている。学校の放課後はブラスバンドでE♭バスを吹き、帰宅後は真空管式ステレオシステムでLPレコードを聞き漁った。

アメリカで世界初のステレオLPレコードが発売されたのが昭和三十三年、それから日本でもステレオ装置が製品化されどんと普及していった。レコードもモノラルLPからステレオLPへと急速に移行しつつあった。当時繰り返し聞いたワルター指揮のベートーヴェン「田園」やマーラー「巨人」、クリュイタンス指揮のフォーレ「レクイエム」などは、記念碑的な名演奏、名録音だ。これら一九六〇年前後のステレオ最初期



音の真実を 追求して

加藤 敏久

の録音が、いまだに聞く人の心を揺さぶるのは、なぜだろう。二つのスピーカーが発する音の空間表現が、それまでの再生音の概念を劇的に変え、録音と再生の可能性を一気に拡張した。その熱い期待と感動を、当時の演奏家をはじめ、録音やレコード制作に携わるすべての人々が共有し、一枚のLPに注ぎ込んだからではないだろうか。

二年生の三学期には、今から思うと無茶苦茶に作曲したピアノ曲の楽譜を音楽の新井文夫先生に見てもらった。「僕は作曲の事はよく分からないんだよ」という言葉だった。作曲家を目指して芸大へ行きたいと聞いた母親が青ざめて担任の有沢与志雄先生に相談に行ったらしい。うすうす自分でも無理だろうなと感じていたから、諦めるのは速かった。そのかわり、レコード音楽の再生音にこだわる気持ちは、残った。

先人達の苦闘の歴史を知るほど、頭の下がる思いをする。現在、日本のスピーカー技術は世界の一つの頂点を極めている。物理的にこれ以上はあり得ない限界に達しつつある。たとえば、電気信号を音声信号に変える振動板は、フィルム形状を保てる物質で最も軽い元素、原子番号4のベリリウムだ。これ以上軽い材料はあり得ない。それを歪なく振動させるために、磁気回路は磁性体の限界磁束密度をもち、磁気ギャップを限界まで狭める・・・等々

再生装置がここまできたら、私に残された道は、音源制作、録音だ。ピアノは弾けないし、作曲もできないけれど、録音によって自分の音を表現し、世に問える。幸い、録音機材にプロとアマの差はなくなった。しかも、アマの強みは作品を人を買ってもらう必要がないこと。思う存分に実験的な試みができる。マイクアレンジ次第で、再生される音は千変万化する。しかも、これが真実の音で、それ以外は論外だというような音は存在しない。どういう音で録るかはすべて自分の感性にかかっている。結果だけがものを言う純粋な世界で、自分なりに音の真実を追求し続ける終わりのない歩みである。

(元魚津高校長 魚高二十回卒)



2008年4月12日、最後の帰郷となった高野さん
(写真左から2番目がコーレ館長の鮫澤さん、中央左が
高野さん、中央右が金三津さん 金三津さんのご自宅で)

『我が親友、悦子さん』

金三津 博子

彼女と出会ったのは昭和十九年。お父さまのご実家がある黒部に疎開して来られたときには「満州鉄道のお偉いさんのお嬢さんがくる」と学校中、大騒ぎだったもので

すよ。寄宿舎の前で、先生も生徒も並んで出迎えたから、頭一つ飛び抜けるほどの長身に、なんとも言えない色白の美しい顔、まるで女優さんのようでした。

辛い顔一つせず：悦子さんは、成績もスポーツも抜群。籠球（バスケットボール）では、悦子さんがどんどんシュートを決めるものだから、女子学校の大会で優勝していました。心も強かったのですね。戦争中ですから、紡績工場や重工場なんかに行かされることもしばしばありました。けっこうな重労働なのに、悦子さんはいつも笑顔なんです。後で聞いた話ですが、悦子さんは満州では大きなシャンデリアのある邸宅に住んでいたらしいのです。そんな優雅なところから、小さな家を借りる暮らしに変わっても、辛い顔一つせずに、よく辛抱していたものですね。でも、一度、一緒に先生に直談判をしたことがあります。悦子さんの疎開先は黒部の山田。冬は大雪で通学できないので、寄宿舎に住んでいました。宿舎では、夜八時になると一切の電灯は消されてしまいます。戦争中だから仕方ない、みんなそう思っていました。でも、悦子さんは、それでは、読書も勉強もできない、「二時間だけでも電灯を点けてほしい」と先生に涙ながらにお願いをしたのです。あのときの、悦子さん

岩波ホール総支配人・文化功労者 追悼 高野悦子さん

高野悦子さんのプロフィール

- 1929年 5月29日 旧満州(現中国東北)生まれ
- 1945年 5月 父の故郷富山県下新川郡山田村(現黒部市)に帰国
- 1946年 3月 富山県立魚津高等女学校卒業
- 1951年 日本女子大学社会福祉学科卒業
- 1952年 東宝製作本部芸芸部入社、1958年退社
- 1958年 パリ高等映画学院(IDHEC)監督科に入学
- 1961年 IDHEC卒業、帰国
衣笠貞之助監督の助手を務める
テレビドラマの脚本、演出を手がける
- 1968年 2月 岩波ホール創立と同時に総支配人に就任
- 1974年 2月 川喜多かじこ氏とともに〈エキブ・ド・シネマ〉を主宰
- 1985年～2012年 東京国際女性映画祭
ジェネラルプロデューサーを務める
- 1997年 9月～2007年 8月 国立フィルムセンター初代名誉館長を務める
- 2004年 11月 文化功労者に認定
- 2006年 6月 (社)日本ポルトガル協会会長に就任
- 2013年 2月 9日 永眠、享年83歳

高野悦子さんを偲ぶ会

(公財)黒部市国際文化センター事務局長 鮫澤祐二

の必死な顔は忘れません。ああいう強い思いが、フランス留学や、映画の世界での彼女を支えたのでしようね。映画界で活躍されるようになってからも東京や魚津でお会いしていましたが、「かねみっちゃん、私、これで二日間、朝から晩まで映画を見つばなしなのよ」とニコニコ笑顔で言っておられました。きつと随分、身体に無理を強いていたのだと思います…。映画に込められた「平和」への思い

画じゃないんです。こちらが見て、考えさせられるような映画です。そして、どれも根っこにあるのは「平和」への思いなんです。家族、友達を大事にし、故郷を思う心を持つ悦子さんならではの映画ね。今、悦子さんが亡くなって、一番思い出すのは、僧ヶ岳を背景にもんぺ姿で生き活きと自転車で乗る悦子さん。戦争中でいろいろな物が不足していたとはいえ、のどかな田舎だった魚津を彼女は大好きだったと言っていました。「悦子さんの映画」の中には、あのようなのどかな空気があるように思うのです。(魚女二十二回卒)

東京神田神保町にある岩波ホール総支配人の高野悦子さんが今年、二月九日に他界されました。(享年八十三歳)高野さんはお父様が黒部市出身ということで昭和二十年五月にお父様の勤務地である満州(中国東北部)から黒部市に疎開されました。その年の八月十五日には終戦を迎えるわけですが、高野さんは約一年間、現在の魚津高等学校の前身である魚津高等女学校に通われました。平成七年にコーレが開館することになり、名画上映の企画について高野さんにご相談したことがきっかけで高野悦子企画・構成によるコーレ「世界の名画を見る会」が発足し、岩波ホールで上映された日本を含む世界の名画をコーレでも鑑賞できるようになったわけです。今年四月十四日には三十三回目の作品「木洩れ日の家」(ポランド映画)を上映しましたが、この作品は昨年の秋に高野さんが存命中に選ばれた作品でした。コーレでは、高野さんと共にエキブ・ド・シネマ(映画の仲間)運動をされていた大竹洋子さんや岩波ホールで高野さんの秘書をされていた石井淑子さんもお招きして高野さんの故郷である黒部市で偲ぶ会を開催しました。写真のように高野さんの御影と記帳台を設置し、堀内康男市長の挨拶で開会し、開館当時か



ら高野さんと親交の深かった方々や前市長の荻野幸和さんに思い出を語っていただきました。特に魚津高等女学校時代に高野さんの同級生であった金三津博子さん(魚津市在住)には女学校時代の高野さんについてユーモアたっぷりに話したくなど、大変有意義な二時間半を高野悦子さんの御霊と共に過ごさせていただきました。ちなみに六月三日には東京の帝国ホテルでお別れの会が催されました。

魚高が教えてくれたこと

長崎 亨



高校時代を振り返ってみて考えたのですが、今もあまり変わらない毎日を過ごしているように感じます。学校生活の何よりも部活動を優先し、クラスメートから冷たい視線を感じることもありましたが、時間ぎりぎりまで通学し、いったん閉まった列車の扉を開けてもらったこともしばしば。学習にいたっては「予習を…復習が…」と思いつつ、三年間が経ってしまった記憶があります。そんな日々ではありましたが、今の自分の礎となっているものは、この高校時代に学んだものです。

から教わることの方が多く、日々勉強の毎日です。その中でも、やっぱり主体性と集中力の二つを大切に毎日過ごしています。これまでもこれからも、魚高が教えてくれたことを胸に精進していきたいと思っています。

学ぶ楽しさこれから

尾谷 昌則



英語の先生になりたくて、大学は英文科に進学し、有り難いこと

例えば主体性。当時の部活動は生徒自身がメニューを考え、練習に取り組んでいました。自分たちが頑張った分結果がついてくる。手を抜いた分思い通りの結果は出ない。未熟な面はあったと思いますが、そこには意思があり、責任がありました。主体性をもって取り組むことの大変さとおもしろさを学んだ気がします。それから集中力。通学時間が長かったこともあり、何事にも時間が足りず苦しんだ覚えがあります。同郷の先輩から教えていただいた言葉「遊び半分は三時間より本気の一時間」を胸に、時間を有効に使うと毎日過ごしました。この言葉は、学習時間が短い言い訳になることもありませんが…。

さて、私は今、小学校の教員となり、人にもものを教える立場にあります。教える立場と書きましたが、実は子どもたち

大学では言語学を教えている。若者言葉について研究しているため、学生達との雑談も、私にとつては貴重なデータ収集の場になる。面白い言葉遣いを見つけた時は、すかさず質問を投げかけ、そのまま学生達とのディスカッションへ。学生と酒を飲みながら語ることも多いため、気分だけは今でも二十五歳のつもりだが、コレステロール値だけは誤魔化せない。(笑)

あれから21年
こんな毎日です
(魚高44回生より)

姿は、魚高で学んでいたあの青春時代とともに、学ぶことが本来とても楽しいものであるということをお出しさせてくれる。思えば、私に学ぶことの楽しさを最初に教えて下さったのは、魚高時代の恩師の先生方であった。遠藤先生、高島先生、山口先生、酒井先生、赤川先生、小柴先生、稲原先生、木村先生、岡部先生、穴口先生、木谷先生…個性の強い先生方が放つ独特のオーラのおかげで、苦しかったはずの勉強も、随分楽しい思い出になった。自分もいつかそんな教師になれるだろうか。

つまでたつても同級生であり、魚高生としての誇りを常に持ち続けています。私は生まれてこの方地元で暮らし続けて四十年になります。現在は地元の役所に勤務して十八年目となりました。毎日住民の方から元気をもらいながら役所で楽しく働いています。忙しくストレスの多きこの時代に、住民の方が様々な用事で役所にやって来て、庁舎内に入るとホッとできる場所であるようにと日々奮闘しています。

現在の私の夢(の一つ)は、魚高の後輩にこの学ぶ楽しさを伝えることである。法政大学文学部に入學してくれば頂上至極だが、いつか出張講義で魚高にお邪魔できれば幸いです。

自分の好きな仕事に就いても、時々大変と思うことがあります。孔子の論語によると、四十歳のことを「不惑」といい、「四十にして惑わず」つまり「狭い見方に捕らわれることなく、心の迷いがなくなる」そうです。しかし、実際に四十歳にして思うのは、あきれられる程に心の迷いが多いことです。

不惑を迎えて

澤田 健一



思い起こせば平成四年三月に第四十四回生として卒業しました。あれから早二十一年の歳月が過ぎようとしています。しかし、何年が過ぎようとも同級生はい

最後にになりましたが、魚津高等学校が今後益々発展し素晴らしい伝統と良き後輩が育つことを祈っています。私自身そのすばらしい伝統を汚さないよう「四十にして惑わ」ない人間に少しでも近づけるよう精進していきたいと思っています。

「東北の今を知ろう」プロジェクト 今、何ができるかを考える

被災者、支援者を招いての被災者交流会
生徒五十名が参加
(6月9日 魚津高校蜚窓館)



魚高新聞部3年の細川尚修くんを発起人として、5月に「東北の今を知ろう」プロジェクトが始動しました。魚津、桜井、泊、新川の生徒たちが、被災者との交流、支援者を講師に迎えての勉強会、東北訪問などを通して、自分たちにできることは何かを真剣に考えています。



支援活動を行ってきた方々7名を招いての勉強会
生徒35名が参加 (7月7日 魚津高校蜚窓館)

勉強会の講師として同窓生もお招きしました。



塩竈市の行政に携わった明石主計さん
(魚高44回) 写真中央

石巻市などで様々な支援活動を行なった
河内聡雄さん (魚高32回)

部成績

○陸上競技部

- 第66回富山県高等学校陸上競技対抗選手権大会 女子100m 2位
女子200m 4位
- 平成25年度富山県高等学校総合体育大会レスリング競技
66kg級 1位 北信越大会出場
- 平成25年度北信越高等学校体育大会レスリング競技
66kg級 3位 インターハイ出場

○水泳部

- 第66回富山県高等学校選手権水泳競技大会
- 男子50m自由形 1位 北信越大会出場
- 男子100m自由形 1位 北信越大会出場
- 男子100m平泳ぎ 2位 北信越大会出場
- 男子200m平泳ぎ 2位 北信越大会出場
- 男子400mメドレーリレー 2位 北信越大会出場
- 女子50m自由形 3位 北信越大会出場
- 女子100m自由形 3位 北信越大会出場
- 女子100m背泳ぎ 3位 北信越大会出場
- 女子200m背泳ぎ 3位 北信越大会出場

○ダンス同好会

- 全国高等学校ダンスドリル選手権大会 甲信越大会
- ヒップホップ部門男女混成スモール編成 1位 全国大会出場
- ヒップホップ部門男子スモール編成 2位 全国大会出場

○放送部

- 第51回富山県高校放送コンテスト
- アナウンス部門 優秀賞3位 2名 NHK杯全国放送コンテスト出場
- 朗読部門 優秀賞3位 2名 NHK杯全国放送コンテスト出場
- テレビドキュメント部門 優秀賞 2位 NHK杯全国放送コンテスト出場
- ラジオドキュメント部門 優秀賞 2位 NHK杯全国放送コンテスト出場

○将棋部

- 第49回富山県高等学校将棋選手権大会
- 男子個人戦 2位 全国高総文祭出場

「東北の今を知ろう」プロジェクトスケジュール

- 5月21日 プロジェクト発足
- 6月9日 被災者交流会
- 7月7日 企画会議
(支援者を講師に迎えての勉強会)
- 8月8日~10日 東北訪問 (南三陸・気仙沼)
- 8月下旬 活動報告会
- 9月20日・21日 魚高祭で発表

小林知代さん来校

世界に羽ばたけ!



6月24日、小林知代さん(魚高31回)をお招きし、講演会を行いました。

現在、アメリカ在住で、コンサルティング会社の代表を務める小林さん。「世界にはワクワクすることがいっぱい。いろんなことを知る人生に」と生徒に呼びかけられました。

原稿募集のお願い

本校同窓生で「こんな方を知っている」「こんな方が活躍している」という方はいませんか? 自薦・他薦は問いません。原稿をお寄せ下さる方募集しています。



富山県立魚津高等学校同窓会
〒937-0041 富山県魚津市吉島945番地
TEL (0765) 22-0221
FAX (0765) 22-9970

同窓会ホームページ
<http://www.nice-tv.jp/~gyokou/index.html>
魚津高校ホームページ
<http://www.uozu-h.tym.ed.jp/>